

## フィンドレー大学奨学生レポート 10 月 「マラソンから見たアメリカ」

### コロンバスマラソン2012

毎年の 10 月下旬にオハイオ州の首都コロンバス (Columbus) にて、「コロンバスマラソン (Columbus Marathon)」という名前のマラソン大会が開かれています。今回のマラソン大会の正式名称は、「2012 Nationwide Children's Hospital Columbus Marathon」といい、これは、一人ひとりのランナーのマラソンの参加料の一部が、コロンバスにある大きな小児科の病院 (Nationwide Children's Hospital) へ寄付されるためです。そして今年は、このマラソンにより約 875,000 ドルのお金が集まったそうです。日本語では、「チャリティマラソン」と呼ばれるかもしれませんが、私は一度も参加したことがありませんでした。フルマラソンの参加者が 5,000 人、ハーフマラソンの参加者が 10,000 人という大きなマラソン大会が、チャリティという点を前面に打ち出しているのは、素晴らしいことだと思います。この素晴らしい大会に、私は、日本にいるときから出てみようと思っていました。なぜなら、私は埼玉県とオハイオ州の友好関係の橋掛かりとなる埼玉親善大使であり、さらに偶然にも趣味がマラソンだったからです。



元気なランナーたち

コロンバスは私が住んでいるフィンドレーから車で 1 時間 50 分くらいの距離に位置します。この都市は、オハイオ州の他の都市 (クリーブランド、シンシ

ナティなど) に比べて、歴史は少ないですが、オハイオ州の首都なので、都市化が進んでいます。このマラソンのコースを走ると、ランナーたちは、コロンバスの都市を一望できるため、すばらしいコースだと言われています。しかし残念なことに、スタート後、悪天候のため、ランナーたちの視界は、深い霧につつまれ、最初の 10km では、都市を一望できる状況ではありませんでした。ランナーたちの気分を盛り上げる景色が存在していなかったため、当然、私の頭の中は、苦しい思いでいっぱいでした。走っている途中、このマラソンを「カントリーロード、苦行の旅」と名付けたほどです。

長い道のりを走っていて、最も気になった点は、人々の応援の仕方です。彼らの応援の仕方は、なんとというか勢いがありました。アメリカの人々は、「グッジョブ！ (Good Job!!)」、「オールモウストゼア！ (Almost there!!)」、または、単に叫びランナーを鼓舞します。一方、日本のマラソン大会の観客の方々は、「がんばれー」と穏やかに、しかし、力をこめて励ましてくれました。私はここに、アメリカと日本の感性の違いを感じました。なぜかというと、日本の人々は、言葉の内容に、重点を置く一方、アメリカの人々は、声の勢い・声量、しゃべりかたに重点を置いているように感じたからです。やはり、私は日本人なので、走っている時、日本の応援が聞きたくてしょうがありませんでした。一緒に付いてきてもらった日本人の友人の声を必死で探しますが、結局、一度も聞こえることはありませんでした。アメリカに入国して以来、最もホームシックを感じていたと思います。

また、ランナーがレースの途中で、会話をするという点にも驚きました。どんな内容を話しているのかよくわかりませんが、皆、楽しそうに話していました。一方、日本では、皆、黙々と会話せずに走ります。おそらく、多くの日本人のランナーたちは、会話するエネルギーを、より速く走るためのエネルギーに使いたいと考えるのではないのでしょうか。私もその一人です。このことから、アメリカの人々は、ひとつのイベントに対して、それをいかに楽しむということを重視し、一方、日本の人々は、ひとつのイベントでいかに自分が磨いてきたものを最大限だすかということを重視しているのではないかと、思いました。それぞれの人にもよりますが、私は両者の国民性を垣間見ました。

結局、3時間4分ほどでなんとかゴールしました。ゴール後は、苦しみからの解放感、42.195km 走り終えた達成感、それと目標だった 2 時間台に及ばない悔しさに包まれていました。しかし、そんな自己の世界に浸っていた私を現実に引き戻したのは、アイスクリームでした。なんと、アメリカでは、ゴール後にアイスクリームを完走したランナーに配るのです。私は、少々困惑しながらも、おいしくいただきました。とても苦しかったです、とてもいい経験をさせていただきました。



ゴール後、完走メダルをかじる私